

# 幕末維新时期における太閤記物の切附本・絵本類の基礎的研究

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本文学研究専攻 伊藤 美幸

## 要 旨

太閤記物の流行は文化元（一八〇四）年に読本『絵本太閤記』が絶版を命じられたことで一時期下火になるが、幕末維新时期に再び隆盛し、『絵本太閤記』の影響を受けた錦絵や切附本が次々と出版された。近年は武者絵や太閤記研究の進展により、幕末維新时期に出版された太閤記物の切附本・絵本類に関して言及される機会が増えている。しかしながら、巻数や出版年といった基本事項さえも不明なものがあり、幕末の太閤記物を網羅的に把握することは容易ではない。

そこで本稿では、幕末維新时期における太閤記物の全貌の把握を目指して、太閤記物の切附本・絵本類の書誌調査を行った結果をまとめる。また、ゆるやかな括りで時期や版元別に作品を分析することで、その形態的特徴や傾向を明らかにする。

まず、嘉永・安政期（一八四八～五九）頃の作は版元未詳であることが多く、形態や版面様式は多様であるが、基本的には漢字仮名交じりの本文で、見開き一～四丁毎に挿絵が入るといった典型的な切附本の様式に基づいて作られている。つづいて、万延元年～明治三（一八六〇～七〇）年頃は、山口屋藤兵衛や吉田屋文三郎・藤岡屋慶次郎が典型的な切附本の様式で太閤記物を出版しており、秀吉による天下統一以前の物語を端的に抄録している。また、小田原屋弥七は各丁に武者の絵と略歴とを記した銘々伝形式の切附本を出版しており、慶応元（一八六五）年頃からは、伊勢屋庄之助や文久堂、大和屋喜兵衛、加賀屋吉兵衛、丸屋鉄次郎、大島屋伝右衛門による全丁絵入りの切附本が増えている。

上方の切附本・講談読み物に関しては、網羅的な調査の過程で文精堂の切附本を数点確認できた他、藤屋菊治郎が全丁彩色入りの絵本を出版していることが明らかになった。

全体を俯瞰すると、幕末維新时期における太閤記物の切附本・絵本類の版面様式は多岐に渡ることが確認でき、ジャンルとしての統一性は見出しにくい。しかし、江戸では慶応期頃から山口屋藤兵衛を筆頭に、軍記や仇討物のシリーズ化が進み、シリーズ化に伴い一作の丁数が減るといった傾向が見出せる。また、明治期には全丁絵入りの切附本が増え、歌川芳虎やその門下の浮世絵師が活躍している。幕末維新时期の切附本・絵本類の流れを汲む太閤記物は明治十（一八七七）年以降にも見出せ、太閤記を題材にした錦絵の出版も踏まえるならば、太閤記物の流行が広範囲に及んでいたことを指摘できる。

キーワード：切附本 絵入本 武者絵 太閤記 豊臣秀吉

# Basic Study on Picture Books Themed on *Taikōki* in the Mid-19th Century

ITO Miyuki

Department of Japanese Literature,  
School of Cultural and Social Studies,  
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

## Summary

This paper presents a basic study on picture books published around the mid-19th century themed on *Taikōki* (biography of Toyotomi Hideyoshi), in particular, picture books called *kiritsukebon*.

*Kiritsukebon* refers to inexpensive picture books for the mass audience published from the end of the Edo period to the early Meiji era. As the popularity of *Taikōki*-themed works grew from approximately 1864 to 1872, *kiritsukebon* themed on *Taikōki* were published by many booksellers. However, there are many unclear points regarding the actual state of the production of *Taikōki*-themed works, their distribution, and how they were accepted as they were developed in various media. This paper examines the bibliography of *Taikōki*-themed *kiritsukebon* and picture books with the aim of elucidating the overall picture of *Taikōki*-themed works in the mid-19th century as an ultimate goal and analyzes these works by publication year and bookseller to clarify the characteristics of their forms and styles.

From 1848 to 1859, works in various form were produced by unknown booksellers, as well as by Kikuya Kozaburo. They were generally made in the typical *kiritsukebon* style, and the text is a mixture of *kanji* and *kana*. One picture is printed on every one to four double-page spread. From 1860 to 1870, *Taikōki*-themed works in a typical *kiritsukebon* style were published by Yamaguchiya Tobei, Yoshidaya Bunzaburo and Fujiokaya Keijiro. Odawaraya Yashichi also published picture books in the *meimeiden* style (a format with a portrait and brief biography of a famous warrior on each double-page spread). Starting around 1865, more books were published with pictures on all double-page spreads by booksellers such as Iseya Shonosuke, Bunkiyudo, Yamatoya Kihei, Kagaya Kichibei, Maruya Tetsujiro, and Oshimaya Den-emon. It is confirmed from exhaustive bibliographic research that *kiritsukebon* was published by Bunsheido, and a full-page colored picture book by Fujiya Kikujiro was sold at booksellers in Kyoto and Osaka.

The forms and styles of *Taikōki*-themed works from the end of the Edo period to the early Meiji era are diverse, and it is difficult to find uniformity as a single genre. It is observed that the number of pages of each work tended to decrease as the serialization of war stories and revenge stories started to become more popular starting in about 1865. In the Meiji era, booksellers published more *kiritsukebon* with pictures on all double-page spreads. These works were drawn by Utagawa Yoshitora and his school of *ukiyo-e* painters under the influence of *Ehon Taikōki* (Picture Books of Hideyoshi, by Takeuchi Kakusai, 1797-1802). The *kiritsukebon* style is found even after 1877. *Nishiki-e* themed on *Taikōki* were also published around this time, indicating the widespread popularity of *Taikōki*-themed works.

**Key words:** *kiritsukebon*, picture book, *musha-e*, *Taikōki*, Toyotomi Hideyoshi

- はじめに
- 一. 嘉永・安政期頃の切附本
  - 二. 慶応期前後の切附本
  - 三. 挿絵主体の切附本・絵本類
  - 四. 銘々伝形式の切附本・絵本類
  - 五. 上方の切附本・講談読み物  
おわりに

## はじめに

豊臣秀吉の立身出世譚や秀吉ゆかりの武将が活躍する武勇譚が描かれた太閤記物は近世を通じて人気が高い。特に、寛政九（一七九七）年から享和二（一八〇二）年にかけて出版された武内確齋作・岡田玉山画の読本『絵本太閤記』は太閤記が一般に広まる契機となり、その挿絵は「武者絵に對する庶民の関心を高め、武者錦絵の市場を拡大し、武者絵史上に大きな転換期をもたらした」<sup>(1)</sup>と評価を受けている。太閤記物の流行は文化元（一八〇四）年に『絵本太閤記』が絶版を命じられたことで一時期弱まるが、幕末維新期に再流行し、『絵本太閤記』の影響を受けた錦絵や切附本が次々と出版された。

切附本（切附物）とは、幕末から明治初期にかけて出版された大衆向けの絵入り読み物であり、①切附表紙で作られた本、或いは②講談の種本である実録体小説（実録）や読本等から題材を取った抄録本のことをいう。嘉永・安政期頃を中心に安価で手軽な商品として大量生産・消費され、明治初期以降は次第に生産力を減少させつつも、明治期を通して全国で流通した。切附本の体裁や様式・史的背景に関しては高木元氏による先駆的な研究があるので<sup>(2)</sup>、本稿では、後者②の意味の切附本の

うち、幕末維新期の太閤記物に限って検討する。また、切附本は見開きで本文一・二丁毎に挿絵が一図入るといふ様式が多いものの、絵を主体とし本文の分量が少ないものも見られ、同時期の絵本類との様式的な境界線が曖昧であることから、ここでは「切附本・絵本類」と称して、同時期の中本型の草紙類を含む緩やかな総体として取り上げたい。

ところで、近年は武者絵や太閤記研究の進展により、幕末維新期に出版された太閤記物の切附本・絵本類に関して言及される機会が増えている。例えば、金時徳氏は近代に出版された夥しい量の太閤記物の近世的起源として幕末の太閤記物の切附本・絵本類に言及されている<sup>(3)</sup>。また、近年はデータベースでの公開が進んだことで、切附本・絵本類の画像を比較的容易に入手することができるようになった。今後は人名・家紋・文様・場面などのあらゆる検索が可能となり、挿絵を多く含む太閤記物の切附本・絵本類が活発に取り上げられることが予想される。しかしながら、幕末維新期の切附本・絵本類は改装や合綴、改題、改竄が頻繁にみられ、巻数や出版年といった基本事項さえも不明なものがあり、幕末の太閤記物の全貌を把握することは容易ではない。

そこで本稿では、版元別に太閤記物の切附本・絵本類を整理し、現段階で判明しているものについて、形態的特徴や傾向をまとめることで、慶応期～明治初年頃にかけて出版された太閤記物の把握を目指す。また、本稿で取り上げる切附本・絵本類は、太閤記以外の軍記や仇討、一代記を含めてシリーズ化しているものが多い。このことから、切附本をはじめとする講談題材の草紙類の出版動向や作品間の相互関係に着目する。本稿で取り上げる版元及び作品は次の通りであるが、様式や体裁、出版地、刊行年順を考慮したうえで、便宜上の通し番号を振っている。なお、書名は原則内題を採用した。

- (1) 版元不明(嘉永・安政期) 『豊臣昇進録』 『新書太功記』 『本能寺山崎両軍記』 『静ヶ嶽七鎗軍記』  
 『絵本日吉丸』
- (2) 菊屋幸三郎版  
 『正清一世英勇伝』 『賤ヶ嶽軍記』 『四国攻軍記』  
 『日吉丸誕生記』 『桶狭間統軍記』 『勢州軍記』  
 『岩倉攻軍記』 『山崎大合戦』
- (3) 山口屋藤兵衛版  
 『絵本太功記』
- (4) 吉田屋文三郎版  
 『羽柴雲昇録』
- (5) 藤岡屋慶次郎版  
 『絵本太閤記』
- (6) 伊勢屋庄之助版  
 『真柴軍功記』
- (7) 文久堂版  
 『真像太閤記図譜』
- (8) 大和屋喜兵衛版  
 『絵本太豊記』
- (9) 加賀屋吉兵衛版  
 『絵本久吉一代記』 『豊臣太閤記』
- (10) 丸屋鉄次郎版  
 『真柴勲功図会』
- (11) 大島屋伝右衛門版  
 『尼ヶ崎合戦』 『山崎争戦』 『豊臣四国征伐』 『朝鮮征伐』 『天目山争戦』 『賤ヶ嶽』
- (12) 版元不明(高名合戦記)  
 『豊臣英名百勇伝』 『勇臣英名百雄伝』 『豊臣軍功美談』
- (13) 小田原屋弥七版  
 『豊国武将年代記』
- (14) 文精堂版  
 『英傑三国誌伝』
- (15) 藤屋菊治郎版

書誌調査は高木元氏が作成された「切附本書目年表稿」<sup>(4)</sup>を土台にしており、本稿が高木氏の研究の上に成り立っていることを付記したい。また、明治期に入ると、銅版・活版の出版物が増加するが、本稿では木版印刷の切附本・絵本類を中心に論じていく。各作品の書誌は、冒頭に書名・書型・巻数・丁数・作者・出版年・版元・所蔵先を示した後、その詳細を、外題・見返・内題・尾題・柱・丁数・作者・絵師・序・改印・

奥付刊記・表紙・挿絵・備考の順に記した。

#### 一・嘉永・安政期頃の切附本

嘉永・安政期(一八四八〜五九)頃に出版された太閤記物五作を取り上げる。この時期の作は出版年未詳のものが多く、(1)版元不明の『豊臣昇進録』 『新書太功記』 『本能寺山崎両軍記』 『静ヶ嶽七鎗軍記』 はすべて摺付表紙、漢字仮名交じりの本文で見開き二〜四丁毎に挿絵が一図入る。『豊臣昇進録』のみ、中本より少し大ぶりの半紙本型に摺付表紙を施しており、この特徴的な形式が嘉永期頃の出版と思われる作品に見受けられることから、嘉永期頃の出版と推測する。一方、(2)菊屋幸三郎版『絵本日吉丸』は三方折込表紙に短冊形題簽を備えた袋入本であり、漢字仮名交じりの本文で見開き二・三丁毎に挿絵が一図入る。

#### (1) 版元不明(嘉永・安政期)

『豊臣昇進録』(図1・2)

半紙本二編二冊 全二十六丁 直政画 嘉永期頃

\*国文学研究資料館(ナ10511-2)

【外題】『豊臣昇進録』(初・二) 【見返】『豊臣昇進録』(初) 【尾題】『豊臣昇進録』(二) 【丁数】全二十六丁、初編最終丁と二編第一丁目が重複(丁付はいずれも十三丁) 【作者】未詳 【絵師】直政(表紙) 【表紙】摺付表紙【挿絵】各編見開き三図【備考】内題・柱題・改印・序なし。一般的な切附本の書型は中本だが本作は半紙本であり、切附本の黎明期にあたる嘉永期の作と考えられる。

『新書太功記』(図3)

中本二編二冊 骨董軒雅楽補輯 歌川芳宗画

\*初編はデータベース上で高木本<sup>(6)</sup>(TKg-108、二十一丁以下破



損)を確認、二編は国文学研究資料館本(ナ41050)を実見し、情報を補った。

【外題】「豊臣一代記」(初・二)【内題】「新書太功記」(二)【尾題】「新書太功記」(二)【柱】「日吉」(初・二)【丁数】初編は二十一丁以下破損、二編は二十九丁。【作者】骨董軒雅楽【絵師】芳宗(初編表紙)【序】「初夏卯月仲旬 市□商家骨董屋雅楽題」(二)【表紙】摺付表紙【挿絵】初編口絵一図・見開き四図、二編口絵一図・見開き六図、二・三丁毎に一図が入る。【備考】見返題・改印なし。

#### 『本能寺山崎両軍記』

中本一冊 二十五丁 作者未詳

\*実見できなかったものがないため、データベース上で高木本(Tkg03-0357)を確認。

【外題】「本能寺合戦」【尾題】「本能寺山崎両軍記」【柱】「本能寺」【丁数】二十五丁【作者】未詳【絵師】未詳【表紙】摺付表紙【挿絵】口絵一図、挿絵四図【備考】見返題・内題・改印・序なし。

#### 『静ヶ嶽七鎗軍記』

中本二編二冊 骨董軒主人序

\*実見できたものがないため、データベース上で高木本(Tkg-9798)を確認。

【外題】「志津ヶ嶽七鎗軍記」(初・二)【内題】「静ヶ嶽七鎗軍記」(初・二)【尾題】「静ヶ嶽七鎗軍記」(初)、「七鎗軍記」(二)【柱】「七鎗」(初)。「七鎗後」(二)【丁数】二十四丁(初)、二十五丁(二)【作者】骨董軒主人【絵師】未詳【序】序首「静ヶ嶽七鎗軍記」(初)、骨董軒主人序【表紙】摺付表紙【挿絵】初編口絵一図・見開き四図、二編見開き五図。見開き三・四丁毎に一図が入る。【備考】見返題・改印なし。

#### (2) 菊屋幸三郎(金幸堂)版

『繪本日吉丸』(図4)

中本三輯三冊 嘉永五年 菊屋幸三郎版

\*国文学研究資料館鈴木本と個人蔵本とを実見。

【外題】題簽欠(『繪本日吉丸』)【内題】「繪本日吉丸」(初・三)【尾題】「日吉丸」(初・三)【柱】「日吉丸」(二・三)【丁数】個人蔵本は二輯五十七丁(丁付三・五十九)、三輯五十二丁(丁付三・五十五)【作者】未詳【絵師】未詳【序】序首「日吉丸」(二)【改印】「村田」「衣笠」「子四」(二) 嘉永五年四月【表紙】三方折込表紙【挿絵】一編につき口絵見開き三図・半丁二図・挿絵十三図(見開き・半丁含む)。本文二・三丁毎に見開き一図が入る。【備考】見返題なし。個人蔵本は序丁を欠くものだが、国文学研究資料館鈴木本は書型が半紙本(二十二・三×十五・三糎)であり、色摺りの序丁を備え、口絵に薄墨等が用いられている。

#### 二・慶応期前後の切附本

万延元年～明治三(一八六〇)～一八七〇)年までの十年間に出版された切附本のうち、典型的な切附本の様式で作られた(3) 山口屋藤兵衛版軍記・仇討物シリーズ、(4) 吉田屋文三郎版『繪本太功記』、(5) 藤岡屋慶次郎版『羽柴雲昇録』を取り上げる。

山口屋藤兵衛は文化元(一八〇四)年頃に創業した版元であり、草双紙や錦絵、千代紙を主要商品とした地本問屋である(6)。当時の版元の中では切附本の出版が最も多く、元治元年～明治二(一八六四～六九)年にかけて、上中下三巻三冊の切附本を十二作出版している。これらの切附本は軍記や仇討を題材としていることから、ここでは仮に軍記・仇討物シリーズと呼びたい。

一方、吉田屋文三郎と藤岡屋慶次郎は、秀吉による天下統一以前の物

語を端的に抄録した切附本を出版している。両者ともに、各巻を合冊した袋入本と各巻を分冊した摺付表紙のものとを確認できる。このように、切附本（摺付表紙）と袋入本（三方折込表紙・広義の切附本）との両形態で出版された事例は、太閤記物以外の切附本にも見出せる。袋入本の方が高く売れたと推測されるが、両形態での出版・流通が版元にとってどのような利益をもたらしたのかは明らかではない。以下、各作品の書誌を記す。

### (3) 山口屋藤兵衛（錦耕堂）版

山口屋藤兵衛は元治元年～明治二（一八六四～六九）年にかけて、十二作の切附本を出版している。

#### 【山口屋藤兵衛版軍記・仇討物シリーズ】

- ① 『正清一世英勇伝』 元治元年序、② 『賤ヶ嶽軍記』 慶応二年序、
- ③ 『四国攻軍記』 慶応三年、④ 『日吉丸誕生記』 慶応三年、
- ⑤ 『桶狭間統軍記』 慶応三年、⑥ 『勢州軍記』 慶応三年、
- ⑦ 『岩倉攻軍記』 明治元年序、⑧ 『大河主殿一代記』 明治元年、
- ⑨ 『宮本無三四実伝記』 明治二年、⑩ 『川中島両将軍記』 明治二年、
- ⑪ 『伊賀水月録』 明治二年、⑫ 『山崎大合戦』 明治二年

このシリーズは、一作が中本上中下三巻三冊読み切り、一冊二十丁の構成をとっている。表紙は錦絵風の摺付表紙で、陣幕を背景に登場人物の半身像を大きく明快に描き、上中下巻の表紙を並べると三枚続の錦絵のように人物が向き合う構図となる。

山口屋の軍記・仇討物シリーズに言及した先行研究は三つある。一つ目は、一九九五年に高木元氏が、切附本に関する一連の書誌調査の結果をもとに山口屋の軍記物シリーズの存在を明記されているのが最も早

い<sup>(7)</sup>。二つ目は、加藤康子氏が高木氏の論文を引用し、幕末明治の子ども向けの読み物という観点から山口屋の軍記物シリーズを取り上げている<sup>(8)</sup>。三つ目は、二〇一四年に康志賢氏が、二代目岳亭定岡の著作研究の立場から、山口屋の軍記物は、最も典型的な切附本の軍記ものであると言及されている<sup>(9)</sup>。切附本の出版の中でも、山口屋の軍記・仇討物シリーズは非常に目立った存在でありながら、具体的な作品紹介は行われていないままであった。以下、太閤記物八作の書誌を記す。

#### ① 『正清一世英勇伝』

中本上中下三巻三冊 一冊二十丁 二世為永春水作 魁齋芳年画 元治元（一八六四）年序 山口屋藤兵衛版

\* 国立国会図書館本 (207.1161)

【外題】「清正一代記」(上) 【見返】「清正一代記」(上中下) 【内題】「正清一世英勇伝」(上) 【尾題】「清正一世英勇伝」(下) 【柱】「清正」(上中下) 【丁数】各冊二十丁 【作者】二世為永春水 【絵師】魁齋芳年 (表紙・口絵) 【序】「甲子初夏為永春水記」(上) 元治元年 【奥付・刊記】山口屋藤兵衛巻末広告(下) 【表紙】摺付表紙。国会本(大惣本)後補表紙外題「清正一代記」(上中下)。【挿絵】口絵二図・挿絵見開き全十九図。見開き二丁毎に一図が入る【備考】改印なし。

#### ② 『賤ヶ嶽軍記』

中本上中下三巻三冊 一冊二十丁 二世笠亭仙果訳 歌川芳春・芳年・年九・年磨・年房画 慶応二（一八六六）年刊 山口屋藤兵衛版

\* 石川県立歴史博物館本(上下)(大裾391.53)を実見。データバー

ス上で弘前図書館本[中下](W913.56-162)と高木本[上中下](Tkg-255-7、Tkg03-0375-7)とを確認し、情報を補った。

【外題】「賤ヶ嶽軍功記」(上) 【見返】「賤ヶ嶽軍功記」(上下)、「しづ

かたけくつかうき」(中)【内題】「賤ヶ嶽軍記」(上中下)【尾題】「賤ヶ嶽軍記」(上中下)【柱】「賤ヶ嶽」(上中下)【丁数】各冊二十丁【作者】二世笠亭仙果【絵師】芳春(下巻刊記)・芳年(表紙)・年丸(上巻見返)・年磨(中巻見返)・年房(下巻見返)【改印】「□正改」【奥付・刊記】「慶應二丙寅歳春新刻／撰者 二世笠亭仙果」【印】／畫工 一梅齋芳春【印】(下)【表紙】摺付表紙【挿絵】口絵二図、挿絵見開き全二十三図。見開き一・二丁毎に一図が入る。【備考】版元名の記載はないが、各巻に陣幕を背景にした武者の大首絵が描かれている点や版面様式から判断して山口屋藤兵衛版の切附本である。上巻前付けに二世笠亭仙果が参照した「校訂書籍目録」があり、七作の軍記・実録書名が並ぶ。

### ③ 『四国攻軍記』(図5・6)

中本上中下三巻三冊 一冊二十丁 二世笠亭仙果訳 歌川芳春・春年画 慶応三(一八六七)年刊 山口屋藤兵衛版

\*石川県立歴史博物館本〔上下〕(大鋸912-5) を実見。中巻の書誌はデータベース上で弘前図書館本〔上中下〕(W9133.56-367)

と高木本〔上中下〕(TKg-273-5) とを確認し、情報を補った。

【外題】「四国攻軍記」(上)【見返】「四国攻軍記」(上中)、「四く軍記」(下)【内題】「四国攻軍記」(上)【尾題】「四国攻軍記」(下)【柱】「四国攻」(上中下)【丁数】各冊二十丁【作者】二代目笠亭仙果【絵師】芳春(刊記)・春年(上中巻見返)【序】二代目笠亭仙果自序(上)【改印】「卯四改」(上) 慶応三年四月【奥付・刊記】「編者 篠田仙果」【印】／畫工 歌川芳春【印】／発起 馬喰街二丁目錦耕堂梓【印】／慶應三丁卯歳初春」(下)【表紙】摺付表紙【挿絵】口絵見開き二図・半丁一図、挿絵見開き全二十六図。見開き一丁毎に一図が入る。【備考】中巻三十三丁裏／四十四丁裏が錯簡になっており、三十三ウ三十四オ→三十五ウ三十六オ→三十四ウ三十五オ(絵)→三十六ウ三十七オ(絵)

↓三十七ウ三十八オ→三十九ウ四十オ→三十八ウ三十九オ(絵)↓四十ウのように読み進めなければ文意が通らない。山口屋版軍記・仇討物シリーズは基本的に見開きの本文と挿絵とを交互に配置する様式であるため、本作は丁付けや版組を間違えたのではなく、版下書きの段階で書き間違えたものを無修正で出版したと考えられる。

### ④ 『日吉丸誕生記』

中本上中下三巻三冊 一冊二十丁 二世笠亭仙果作 歌川芳春画 慶応三(一八六七)年序

\*石川県立歴史博物館本〔下〕(大鋸912-7) を実見、上中巻の書誌はデータベース上で高木本〔上中下〕(TKg-269-71) を確認。

【外題】「繪本日吉丸軍記」(上)【見返】「繪本日吉丸軍記」(上中)、「多ほん日よし丸ぐんき」(下)【内題】「日吉丸誕生記」(上)【尾題】「日吉丸誕生記大尾」(下)【柱】「誕生記」(上中下)【丁数】一冊二十丁【作者】二世笠亭仙果【絵師】歌川芳春【序】「丁卯発兌 仙果誌」(上) 慶応三年【改印】「卯四改」(上) 慶応三年四月【奥付・刊記】「作者 二世笠亭仙果／畫工 歌川芳春／書舗 錦耕堂梓」(下)【表紙】摺付表紙【挿絵】口絵見開き二図・半丁一図、挿絵見開き全二十九図。見開き一丁毎に一図が入る。【備考】本文は実録写本『真書太閤記』の抜き書きが認められた<sup>10)</sup>。

### ⑤ 『桶狭間統軍記』

中本上中下三巻三冊 一冊二十丁 二世笠亭仙果作 歌川芳春画 慶応三(一八六七)年 山口屋藤兵衛版

\*東京都立中央図書館(和1460)

【外題】「桶狭間軍記」(上)【見返】「桶狭間軍記」(上中)、「をけはざ

まぐんき」(下)【内題】「桶狭間續軍記」(上)【尾題】「桶狭間續軍記  
大尾」(下)【柱】「桶狭間続」(上中下)【丁数】各冊二十丁【作者】  
二世笠亭仙果【絵師】朝香楼芳春【序】「時尔慶應三卯林鐘／式世笠  
亭仙果誌」(上)【改印】「卯六改」(上)慶応三年六月【表紙】摺付表  
紙【挿絵】口絵見開き二図・半丁一図、挿絵見開き全二十九図。見開  
き一丁毎に一図が入る。【備考】内題に「續軍記」とあるように、桶  
狭間以後の物語が中心となっている。

#### ⑥ 『勢州軍記』

中本上中下三卷三冊 一冊二十丁 二世笠亭仙果編 歌川芳春・春年  
画 慶応三年 山口屋藤兵衛版

\* 実見できた資料がないため、高木本〔上中下〕(TKg-261-3)  
をデータベース上で確認。

【外題】「勢州軍記」(上)【見返】「勢州軍記」(上下)、「せいしゅうぐんき」  
(中)【内題】「勢州軍記」(上)【尾題】「勢州軍記大尾」(下)【柱】「勢  
州攻」(上中下)【丁数】各冊二十丁【作者】二世笠亭仙果【絵師】芳  
春(表紙・刊記)、春年(上巻見返)【序】「慶応三丁卯初春 青樟菴  
仙果記」(上)【改印】「卯六改」(上)慶応三年六月【奥付・刊記】「抄  
録編者 二世笠亭仙果(印)／畫師 一棟齋芳春(印)／發兌書肆  
江戸馬喰町二丁目錦耕堂(印)」(下)【表紙】摺付表紙【挿絵】口絵  
見開き二図・半丁一図、挿絵見開き全二十九図。見開き一丁毎に一図  
が入る。

#### ⑦ 『岩倉攻軍記』

中本上中下三卷三冊 一冊二十丁 二世笠亭仙果録 歌川芳春画 明  
治元(一八六八)年 山口屋藤兵衛版

\* 石川県立歴史博物館本〔中下〕(大鑑9912-6)を实見、上巻の

書誌は高木本〔上中下〕(TKg-269-71)をデータベース上で  
確認。

【外題】「岩倉攻軍記」(上)【見返】「岩くらせめ軍記」(上)、「いはく  
らせめ軍記」(中)、「岩くらせめぐんき／戊辰の春」(下)【内題】「岩  
倉攻軍記」(上)【尾題】「岩倉攻軍記」(下)【柱】「岩倉攻」(上中下)【丁  
数】各冊二十丁【作者】二世笠亭仙果【絵師】一梅齋芳春【表紙】摺  
付表紙【挿絵】口絵見開き二図・半丁一図、挿絵見開き全二十八図。  
見開き一丁毎に一図が入る。【備考】改印なし。

#### ⑧ 『山崎大合戦』

中本上中下三卷三冊 一冊二十丁 二世岳亭定岡作 歌川芳春画 明  
治二(一八六九)年 山口屋藤兵衛版

\* 国文学研究資料館本〔中下巻合一冊〕(ハ476:1-2)を实見、  
上巻の書誌は国立国会図書館本〔上中下〕(207-1289)をデー  
タベース上で確認。

【外題】「山崎大合戦」(上)【見返】「山崎大合戦」(上中下)【内題】「山  
崎大合戦」(上中下)【尾題】「山崎合戦」(上中)、下巻尾題は「山崎  
大合戦中之巻尾」のように、中巻と誤植している。【柱】「山崎」(上  
中下)【丁数】各冊二十丁【作者】二世岳亭定岡【絵師】朝香楼芳春【序】  
「時二明治二巳年孟夏 岳亭定岡」(上)【改印】「巳八改」(上中下)  
明治二年八月【表紙】摺付表紙。国会本(大惣本)後補表紙外題「山  
崎大合戦」(上中下)。【挿絵】口絵見開き二図、挿絵見開き全二十八図。  
見開き一丁毎に一図が入る。

#### (4) 吉田屋文三郎(文江堂)版

『絵本太功記』

中本五編五冊 一冊四十丁 二世岳亭定岡記 歌川芳盛画 吉田屋文



三郎版（後印本は山本常次郎版、明治十九年）

\* 国文学研究資料館鈴木本で二・五編を見し、立命館大学アー  
トリサーチセンター本 (arcBK04-0286-01 ~ 05) と国立国会図  
書館本 (特55147) とをデータベース上で確認。

【外題】「繪本太功記」(初～五) 【内題】「繪本太閤記」(初・五)、「繪  
本太功記」(二上下・三上下・四上下) 【尾題】「太功記」(初・四上下)・  
「繪本太功記」(二上下・三上下) 【柱】「太功記」(初～四)・「太閤記」(五)  
【丁数】四十丁 【作者】二世岳亭定岡 【絵師】芳盛 【序】二世岳亭定  
岡序、序首「繪本太功記」(二・三)、序年「丙寅初秋」(初)・「丙寅の秋」  
(四) 慶応二年 【改印】「寅三改」(初) 慶応二年三月、「卯正改」(三)  
慶応三年正月、「卯九改」(五) 慶応三年九月、二・四編改印なし 【奥付】  
刊記】吉田屋文三郎広告あり 【表紙】三方折込表紙、山本和明氏所蔵  
本に墨摺り表紙の二編上下巻分冊本があり、藤岡屋慶次郎版『羽柴雲  
昇録』のように、各巻分冊本と合綴本との両方の形態で出版されたこ  
とが知られる。【挿絵】各冊口絵一図、見開き十八図。四編十八ウ  
十九才の挿絵は本文作者の二世岳亭定岡が描く。【備考】見返題なし。  
国立国会図書館本は明治十九年二月、佐々木廉助編輯、山本常次郎版。  
五巻末に「阿能の局が英戦より蘭丸討死までは次の巻のはじめに記す」  
とあるが、六巻は未見。各巻の前付には作者の二世岳亭自身が書いた  
「集意」「巻意」という梗概が置かれ、早わかり本となっている。本作  
の詳細な書誌学的研究と序文翻刻は康志賢氏の論考が備わる<sup>(1)</sup>。

### (5) 藤岡屋慶次郎（松林堂）版

『羽柴雲昇録』

中本四編上中下巻四冊 一冊十六丁 弄月閑人抄録 歌川芳虎画 慶  
応三年～明治三（一八六七～七〇）年 藤岡屋慶次郎版

\* 国文学研究資料館本 (ハ436-1 ~ 4) を実見、徳島文理大学本

(Ha9135) 初編上中下巻(三冊) を影印で確認。

【外題】「豊臣昇雲録」(初～四)、「見返」「豊臣昇雲録／弄月閑人録／  
孟齋芳虎畫／東京書肆松林堂」(初) 【内題】「羽柴雲昇録」(初上中下・  
二上中下)、「豊臣雲昇録」(三上中下・四上中下) 【尾題】「羽柴雲昇録」  
(初上中下・二上中下)、「豊臣雲昇録」(三上中下・四上中下) 【柱】「豊  
臣」(初～三)、「雲昇録」(四) 【丁数】各巻十六～二十丁 【作者】弄  
月閑人 【絵師】芳虎画 【序】弄月亭主人序、「丁卯秋」(初) 慶応三年、  
「明治午春」(二) 明治三年 【改印】「辰十二改」(二) 明治元年 【奥付】  
刊記】藤岡屋慶次郎広告(四) 【表紙】国文研本は三方折込表紙の無  
地表紙に短冊形題簽のある切附本(袋入本)で、上中下三冊を合綴。  
徳島文理大学本は摺付表紙を持つ上中下巻分冊本である。【挿絵】各  
冊口絵見開一図半～二図半、挿絵見開き十二～十六図 【備考】四編扉  
「豊臣昇雲録」。国文研本には外題角書に「水野慶次郎編集」とある。  
本文は『繪本豊臣勲功記』や『繪本太閤記』の抜き書きが認められる。

### 三、挿絵主体の切附本・絵本類

ここでは七書肆を取り上げ、本文よりも挿絵に比重が置かれた切附本・  
絵本類をみていく。(6) 伊勢屋庄之助版『繪本太閤記』や(10) 丸屋鉄  
次郎版『繪本久吉一代記』『豊臣太閤記』、(12) 版元不明(高名合戦記)  
は全丁挿絵入りで、挿絵の余白に漢字仮名交じりの本文を配した様式で  
あり、合巻に近い。(7) 文久堂版『真柴軍功記』も挿絵と本文とが一体  
になった版面であるが、物語の筋がある丁とない丁があり、歌川貞秀の  
武者絵に重点が置かれている。一方、(11) 大島屋伝右衛門版『真柴勲功  
図会』は、見開き一丁毎に武者の武勇を紹介する本文とその場面を描い  
た挿絵とが交互に入る。(8) 大和屋喜兵衛版『真像太閤記図譜』や(9)  
加賀屋吉兵衛版『繪本太豊記』は全丁色摺りであり、鮮やかな挿絵が武  
者の活躍を一層華やかで劇的なものに演出している。

## (6) 伊勢屋庄之助(松延堂)版

『繪本太閤記』(図7・8)

中本十卷十冊 一冊十丁 二代目立祥・歌川虎種画 明治四  
(一八七二)年 伊勢屋庄之助版

\* 白石市図書館(401、一〜十巻合綴)

【外題】「繪本太閤記」(一〜十) 【柱】「太閤記」(一〜十) 【丁数】各冊十丁 【作者】未詳 【絵師】二代目立祥(二)・林斎虎種(十) 【改印】「未正改」(二)、「未二改」(三・四)、「未三改」(五・六)、「未五改」(七・八)、「未六改」(九)、明治四年 【奥付・刊記】伊勢屋庄之助巻末広告あり 【表紙】摺付表紙。白石市図書館本の表紙は黄緑色の地の上部にある赤色の帯に書名を書き、その下に人物二人の半身像を描く。一方、国立国会図書館本(207-1177、初〜三編)の表紙は田舎源氏風の人物二人の半身像で、歌川芳虎画。また、弘前図書館本(W913.5847、外題「太閤記」)のように各巻を上下巻に分冊し、上下巻の表紙の図柄が繋がるものもあり、改装本が多くみられる。 【挿絵】全丁絵入り 【備考】内題・見返題・尾題・序なし。各巻巻頭半丁に武将の伝記と肖像を描く。一〜三巻は合巻『仮名読太閤記』明治四(一八七二)年木屋宗次郎版の本文を漢字仮名交じりに改めた作となっており、挿絵についても大部分を『仮名読太閤記』から流用している。

## (7) 文久堂版

『真柴軍功記』

中本五編五冊 一冊二十丁 玉蘭齋貞秀作画 元治元年〜慶応元  
(一八六四〜六五)年 文久堂版

\* 横浜開港資料館(PV69)

【外題】「真柴軍功記」(初〜五) 【柱】「真柴」(初)・「真柴軍功」(二〜五) 【丁数】各冊二十丁 【作者】玉蘭齋貞秀 【絵師】玉蘭齋貞秀 【序】

序首「真柴軍功記」(初・二・四・五)、「真柴軍功」(三)、山々亭有人序(初〜五)、序年記「甲子歳晩夏」(二) 元治元年【改印】「□二改」(初)、「子四改」(二)、「子十二」(三) 元治元年、「丑四改」(四)、「丑十二改」(五) 慶応元年 【奥付・刊記】【表紙】摺付表紙 【挿絵】全丁絵入り 【備考】内題・尾題・見返題なし。初・二・四編冒頭に図題目録(目録題「真柴軍功記」)があり、絵師の貞秀は読本『繪本太閤記』の挿絵を踏襲しながらも、視点の工夫や斬新な構図によって多彩な武者の表現を生み出している。このことから、本作が武者絵本としての機能を持ち合わせているといえる。

## (8) 大和屋喜兵衛(宝集堂)版

『真像太閤記圖譜』

中本三編三冊 初・三編三十三丁、二編二十九丁 又玄齋南可画著  
宝集堂版

\* 初・二編は東京都立中央図書館本(特5215)を実見し、三編は東京大学教育学部研究科教育学部図書室富士川文庫本(P825)をデータベース上で確認。

【外題】「真像太閤記画譜」(初〜三) 【見返】「真像太閤記圖譜」(初〜三) 【尾題】「真像太閤記圖譜」/出像又玄齋南可圖/割刷江川仙太郎刀(三) 【柱】「太閤記圖譜」(初〜三) 【丁数】三十三丁(初・三)、二十九丁(二) 【作者】又玄齋南可 【絵師】又玄齋南可 【序】序首「真像太閤記圖譜」(二・三)、都立中央図書館本は初編序丁欠(石川県立歴史博物館本は櫻谷散人・又玄齋南可序) 【奥付・刊記】二編最終丁に大和屋喜兵衛他大坂三書肆・東都十八書肆を列記。 【表紙】都立中央図書館本は初・二編共に改装表紙。 【挿絵】初編は三十三丁裏の他は全て挿絵、二編は見開き五、六丁毎に本文が入る。三編は画中に本文が書かれている丁や本文のみの丁など不規則に組み合わさっている。色摺りあり。 【備考】

内題なし。目録題「真像太閤記圖譜」(二・三)。

(9) 加賀屋吉兵衛 (青盛堂) 版

加賀屋は明治初年頃に全三巻三冊(全丁絵入り)の切附本『繪本太豊記』と『繪本太閤記』とを出版している。「切附本書目年表稿」に記載がある芳虎画『繪本太閤記』は、加賀屋吉兵衛の巻末広告によれば、三巻三冊が出版されたことが確認できる。また、明治十一〜十三年に出版された永島福太郎編・歌川芳虎画の切附本のシリーズのうち、太閤記物は『太閤記本能寺合戦』『太閤記朝鮮軍記』『太閤記九州軍記』『四国攻伐』『朝鮮攻伐』が確認できる。

『繪本太豊記』

中本三編三冊 孟齋芳虎画 慶応元〜明治二(一八六五〜六九)年 加賀屋吉兵衛版

\*初・二編の書誌は徳島文理大学本(EI 913.5)で情報を補い、三編は東京都立中央図書館本(特5332)を実見した。

【外題】「繪本太豊記」(初・三)【見返】「繪本太豊記」(初・三)【柱】「初」  
【二】等の巻数のみ【丁数】初編十七丁【作者】未詳【絵師】孟齋芳虎画【序】序首「太豊記高名画譜」(初・二)・「大豊記高名鑑」(三)、初・二編隅田園了古題・三編春亭京鶴序、【改印】「丑十二」(初・二)慶応元年十二月【奥付・刊記】明治二己巳年正月、加賀屋吉兵衛他東京六書肆(和泉屋市兵衛・蔦屋吉蔵・藤岡屋慶治郎・山口屋藤兵衛・森屋治兵衛・大黒屋平吉)(初)、加賀屋吉兵衛他東京四書肆(丸屋甚八・丸屋鉄次郎・笑寿屋庄七・山本平吉)(二)【表紙】三方折込表紙【挿絵】全丁絵入り色摺り、初〜三編の口絵二丁分が観音開きに展開する。【備考】内題・尾題なし。

(10) 丸屋鉄次郎 (延寿堂) 版

丸屋鉄次郎は慶応期〜明治前半頃にかけて一冊十丁上下巻全丁絵入りの軍記・仇討物を多数出版している。巻末広告をみると二十五作ほど確認でき、太閤記物の①『繪本久吉一代記』や②『豊臣太閤記』もそれらの一つである。

①『繪本久吉一代記』

中本上下巻二冊 一冊十丁 隅田了古識 周重画 慶応二(一八六六)年 丸屋鉄次郎版

\*国文学研究資料館(ナ45181〜2)

【外題】「日吉丸一代記」(上)【柱】「真柴」(上下)【丁数】各冊十丁【作者】隅田了古【絵師】周重(表紙)【序】序首「繪本久吉一代記」(上)、癸亥(文久三年)隅田了古識【改印】「寅二改」(上)慶応二年【奥付・刊記】丸屋鉄次郎巻末広告(上下)【表紙】摺付表紙【挿絵】全丁絵入り。各挿絵の図題の横に、子持ち枠で囲まれた図題説明がある。【備考】国文研本は明治版。内題・尾題・見返題なし。

②『豊臣太閤記』(図9・10)

中本前後編上下巻四冊 一冊十丁 玉蘭齋貞秀作画 丸屋鉄次郎版

\*前編上下巻未見、後編上下巻は白石市図書館本(ナ6)を実見。  
【外題】「豊臣太閤記」(下)【柱】「瓢軍記」(上下)【丁数】各冊十丁【作者】玉蘭齋貞秀【絵師】周重(表紙)、貞秀【奥付・刊記】丸屋鉄次郎巻末広告(上下)、「橋本玉蘭齋譯/同人貞秀畫圖」(下)、【表紙】摺付表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題・見返題・序・改印なし。

## (11) 大島屋伝右衛門版

『真柴勲功図会』初編

中本一冊 二十丁 山々亭有人記 五雲亭貞秀画 文久三(一八六三)年序 大島屋伝右衛門版

\* 東京都立中央図書館(特5320)

【外題】(題簽欠)【見返】「真柴勲功圖會／山々亭有人輯／五雲亭貞秀画／東都書肆 文永堂梓」【柱】「真柴勲功 初編」【丁数】二十丁【作者】山々亭有人【絵師】五雲亭貞秀【序】序首「真柴勲功圖會」、文久三年山々亭有人記【奥付・刊記】大島屋伝右衛門他東都十二書肆【表紙】見開き一丁毎に武者の逸話と色摺りの絵が交互に入る【挿絵】口絵見開き二図、見開き九図・半丁一図【備考】内題・尾題なし。柱心に「初編」とあるが、二編以降は未見。

## (12) 版元不明(高名合戦記)

明治二年頃、「高名合戦記」と題して出版された軍記物シリーズがあり、管見の限りでは七作確認できた。

- ① 尼ヶ崎合戦、② 山崎争戦上巻、③ 豊臣四国征伐、④ 朝鮮征伐初〜四編、⑤ 天目山争戦、⑥ 賤ヶ嶽上下巻、⑦ 川中島争戦上下巻

表紙は帯上の枠に外題が書かれ、その下に睨みあう武者を描く。一冊十八丁で全丁絵入り、一丁表に武者の伝記、一丁裏から本文が始まる。以下、①〜⑥の書誌を記す。

## ① 『高名合戦記 尼ヶ崎合戦』(図11・12)

中本一冊 十九丁 一猛斎芳虎画 明治二(一八六九)年

\* 白石市図書館(501)

【外題】「高名合戦記 尼ヶ崎合戦」【見返】「あまが崎合戦／一猛斎よし虎画」【柱】「尼」【丁数】十八丁【作者】未詳【絵師】一猛斎芳虎【改印】「巳四改」明治二年四月【表紙】摺付表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題・序なし。

## ② 『高名合戦記 山崎争戦』

中本一冊 十八丁 芳虎作画 明治二(一八六九)年

\* 白石市図書館(501)

【外題】「高名合戦記 山崎争戦」【見返】「高めう合戦記乃内／山崎大合戦／錦朝樓著作／一猛斎芳虎画」【柱】「山崎」【丁数】十八丁【作者】錦朝樓【絵師】一猛斎芳虎【改印】「巳四改」明治二年四月【表紙】摺付表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題・序なし。上巻のみ確認。

## ③ 『高名合戦記 豊臣四国征伐』

中本一冊 十八丁 芳虎作画 明治二(一八六九)年

\* 白石市図書館(574)

【外題】「高名合戦記之内 豊臣四國征伐」【見返】「豊臣四國征伐」【柱】「四」【丁数】十八丁【作者】芳虎【絵師】一猛斎芳虎【改印】「巳四改」明治二年四月【表紙】摺付表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題・序なし。

## ④ 『高名合戦記 朝鮮征伐』

中本四冊 十八丁 芳虎画 明治二(一八六九)年

\* 初・二編は白石市図書館本(501)、四編は個人蔵本を实見。三編は未見。

【外題】「高名合戦記 朝鮮征伐」(初)・「朝鮮征伐」(二・四)【見返】「朝



鮮征伐之巻初へん／よし虎畫」(一)・「朝鮮軍記」(二)・「朝せん軍記」(四)【柱】「朝」(初)・「朝鮮」(二・四)【丁数】十八丁【作者】未詳【絵師】一猛齋芳虎【改印】「巳五改」(初)・「巳十二」(二・四)【表紙】摺付表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題なし。

#### ⑤ 『高名合戦記 天目山争戦』

中本一冊 十八丁 (芳虎画) (明治二(一八六九)年)

\* 白石市図書館 (501)

【外題】「高名合戦記 天目山争戦」【見返】「天もく山合戦」【柱】「天」【丁数】十八丁【作者】未詳【絵師】未詳【表紙】摺付表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題・序・改印なし。

#### ⑥ 『高名合戦記 賤ヶ嶽』

中本 十八丁 芳虎画

\* 白石市図書館 (上巻) (501)

【外題】「高名合戦記 賤ヶ嶽上之巻」【見返】「賤ヶ嶽大合戦上之巻」一孟著訳／芳虎画【柱】「賤」【丁数】十八丁【作者】一猛齋芳虎【絵師】一猛齋芳虎【表紙】摺付表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題・序・改印なし。下巻未見。

### 四. 銘々伝形式の切附本・絵本類

ここでは、全丁絵入りの銘々伝絵本を取り上げる。(13) 小田原屋弥七は、各丁に武者の絵と略歴とを記した形式(本稿では銘々伝形式と呼ぶ)を数種出版している。このような銘々伝形式は、山口屋藤兵衛他地本問屋が弘化二年(嘉永六(一八四四)一八五三)年にかけて出版した「○○百人一首」と題した絵本にも共通する。例えば、緑亭川柳作、葛飾北斎・歌川国貞画『烈女百人一首』弘化四(一八四七)年は、上段に

人物の来歴、下段に和歌と絵を配し、絵を見る要素と文を読む要素とが一つの画面に含まれている。また、人物の絵とその略歴とが配される様式は幕末期の錦絵によく見られるものであり、岩切友里子氏によれば、天保の改革によって色版が制限されたことにより、弘化期の歌川国芳《名高百勇伝》などから用いられたという<sup>(12)</sup>。加えて、歌川国芳《太平記英勇伝》(錦絵揃物)の武者図像や詞書をダイジェストした月岡芳年画・仮名垣魯文録『絵本英雄太平記』(遠州屋彦兵衛版他、糸屋庄兵衛版等あり)のように大揃いの錦絵を縮図した抄録本が刊行されている。小田原屋弥七版の銘々伝形式の絵本類は、同時期に出版された大揃いの錦絵を縮図したものとみられる点で、先行作の抄録を中心とする切附本と共通する制作態度が見出せる。以下、その書誌を記す。

#### (13) 小田原屋弥七(大橋堂)版

慶応年間頃、小田原屋は銘々伝形式の絵本を出版しており、一冊二十丁で色摺りのものが多い。

① 『豊臣英名百勇伝』② 『勇臣英名百勇伝』③ 『豊臣軍功美談』  
太閤記に登場する武者を描いた①③の他、同時期に『繡像水滸銘々伝』『魁題百撰相』『近世水滸銘々伝』等が出版されている。

#### ① 『豊臣英名百勇伝』(図13・14)

中本三編三冊 一冊二十丁 近澤幸山編 玉蘭齋貞秀画 文久三(一八六三)年序 玉養堂・大橋堂合梓

\* 初・二編は石川県立歴史博物館本(720・46)を実見、三編はデータベース上で東京大学教育学部研究科教育学部図書室富士川文庫本(P829)を確認し、情報を補った。

【外題】「英名百雄」(初)③【見返】「英名百雄傳初」(二・三)編／近澤幸山先生撰／玉蘭齋貞秀画／癸亥新板／東都書林 玉養堂／大橋堂

／合梓」(初～三)【柱】「百雄傳」(初～三)【丁数】各冊二十丁【作者】近澤幸山【絵師】玉蘭齋貞秀【序】序首「英名百雄傳」(初～三)、文久三年癸亥春日近澤桃堂幸山識(初～三)【奥付・刊記】若林屋喜兵衛・小田原屋弥七合梓・他東都十一書肆を列記(初～三)【表紙】三方折込表紙。石川歴博本は改装表紙・外題後補。【挿絵】半丁に武者の絵と略歴を記しており、石川歴博本は薄墨・薄朱・薄藍を使った色摺りであるが、多色摺りのものも確認できた(図15)【備考】内題・尾題・改印なし。

## ② 『勇臣英名百雄伝』(図16・17)

中本三編三冊 一冊二十丁 玉蘭齋貞秀作画 慶応三(一八六七)年大橋堂版

\* 石川県立歴史博物館本(二編)(720-47)を実見、三編はデータベース上で東京大学教育学研究科教育学部図書室富士川文庫本(1830)を確認し、情報を補った。

【外題】「勇臣英名百雄傳」(二・三)【見返】「勇臣英名百雄傳 二篇／橋本玉蘭齋編並画圖／慶應三丁卯阜月大橋堂藏梓」(二)、「勇臣英名百雄傳 三編／橋本玉蘭齋譯並画圖／慶應四戊辰年大橋堂藏梓」(三)【柱】「百雄傳」(二・三)【丁数】各冊二十丁【作者】玉蘭齋貞秀【絵師】玉蘭齋貞秀【序】序首「勇臣百雄(勇)傳」、慶応三年江境庵花川序(二・三)【奥付・刊記】小田原屋弥七藏版目録(二・三)【表紙】三方折込表紙、石川歴博本は改装表紙・外題後補。【挿絵】全丁絵入り(色摺り)で、半丁毎に武者の絵と略歴を記す。【備考】内題・尾題・改印なし。見返によると二編は慶応三年刊、三編は慶応四年刊。三編三冊が刊行されているが、初編未見。

## ③ 『豊臣軍功美談』

中本一冊 一冊二十丁 玉蘭齋貞秀作画 慶応二(一八六六)年大橋堂版

\* 東京都立中央図書館(和0036)

【外題】(題簽欠)【見返】「豊臣軍功美談／橋本玉蘭齋画作／小田原屋彌七梓」【丁数】二十丁【作者】玉蘭齋貞秀【絵師】玉蘭齋貞秀【序】慶應二丙寅年初冬記南窓／東武墨水閑民江境庵花川述【奥付・刊記】小田原屋又七藏版目録【表紙】三方折込表紙【挿絵】全丁絵入り色摺り【備考】内題・尾題なし。

## 五. 上方の切附本・講談読み物

上方の切附本・講談読み物については調査が及んでいないが、管見の限りでは(14)文精堂(京都)版の切附本と(15)藤屋菊治郎『英傑三国誌伝』を確認できた。文精堂は漢字仮名交じりの本文が中心で、挿絵は一・二図のみである。一方、藤屋菊治郎版『英傑三国誌伝』は全丁絵入り彩色ありの絵入本で、上段に本文・下段に挿絵を施している。

### (14) 文精堂版

『近世書林板元総覧』の文精堂の項には「嘉永『豊臣名士鑑』京」とあり、京都の版元であることが知られる。文精堂の切附本は共紙表紙の小冊子であり、各冊に見開き二丁の目録(図20)が備わっているが、本文中には立項されていない。『豊臣名士鑑』の他に『嘉永増補 太閤記』(図18)『織田名士鑑』『浅井勇士鑑』『浅倉名士鑑』などを出版しており、「名士鑑」と題されているものは合冊されていることが多い。実見することができた『豊臣武将年代記』について記す。

『豊国武将年代記』

中本一冊 二十四丁 三浦翁山撰 文精堂版

\* 東京都立中央図書館 (9144-003)

【外題】「豊国武将年代記」【柱】「太閤」【丁数】二十四丁【作者】三浦翁山【表紙】都立中央図書館本は改装表紙で、原表紙前面に作者・外題・書肆が記載されている。【挿絵】なし【備考】内題・尾題・見返題・序なし、目録あり。改題本に「太閤御一代記」(図19・20)がある。

(15) 藤屋菊治郎版

『英傑三國誌伝』(図21)

中本七冊 一冊二十二丁 弘化五(嘉永三(一八四八)五〇)年

\* 石川県立歴史博物館本 (720-44、三冊) を実見、データベース上で早稲田大学図書館本 (<1303974)・愛知県立図書館本 (Wラ/A289/ト2/39、Wラ/A280/A13) を確認し、情報を補った。七冊目「英傑統三國誌伝」三編は未見。

管見の限り、七冊を確認できた。版面上段に武者の伝記(背景に家紋を散らす)、下段に読本『絵本太閤記』に基づいた絵を描く。

一冊目(愛知県立図書館本)

【外題】「太閤秀吉公實傳 全」【丁数】二十二丁【作者】南壽山人【絵師】(貞芳)【序】「擧秀吉公實傳換叙」／．．．／弘化戊申歲初春 市隱南壽山人誌【表紙】三方折込表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題・見返題なし。

二冊目(愛知県立図書館本)

【外題】(題簽欠)【見返】「英傑三國誌傳／梅窓園畫／秋艸菴著」、大

砲の絵。【丁数】二十二丁【作者】秋艸菴【絵師】梅窓園貞芳【序】「擧右府信長公事跡換叙」／．．．／南壽山人誌【表紙】三方折込表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題なし。

三冊目(石川歴博本)

【外題】「三國誌傳」(後補)【見返】「英傑三國誌傳／梅窓園畫／秋艸菴著」、大砲の絵【丁数】二十二丁【作者】秋艸菴【絵師】梅窓園貞芳【序】「擧藤原清正郷ノ知慮ノ其一事ヲ一換レ叙」【表紙】改装表紙(三方折込表紙)【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題なし。

四冊目(石川歴博本)

【外題】「畫本三國誌傳」【見返】「畫本三國誌傳／秋艸菴著／魁春亭画／嘉永三庚戌歲發行 靖共閣梓」【丁数】二十二丁【作者】南壽山人【絵師】魁春亭貞芳【序】「四海の浪静にして．．．／嘉永三戌のはる／秋艸述」【奥付・刊記】「輯者 南壽山人「南山」／畫工 梅窓園貞芳／魁春」／于時嘉永二巳酉仲夏／發行書肆／東都／山口屋藤兵衛／藤岡屋慶治郎／山崎屋清七／浪花／藤屋菊治郎【表紙】三方折込表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題なし。

五冊目(早稲田大学本)

【外題】「英傑續三國誌傳」【見返】「和漢美立／統三國誌傳／知不足齋梓」【丁数】二十二丁【作者】南壽山人【絵師】(貞芳)【序】「五行を地に配し五倫の道備はり．．．／南壽山人述」【表紙】三方折込表紙【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題なし。

六冊目(石川歴博本)

【外題】「英傑續三國誌傳」【見返】「本朝一大奇書／英傑續三國誌傳第

二集／智不足齋梓【丁数】二十二丁【作者】南壽山人【絵師】（貞芳）  
 【序】「六十餘州は千歳の松に榮え・・・／南壽山人述」【表紙】改装  
 表紙（三方折込表紙）【挿絵】全丁絵入り【備考】内題・尾題なし。  
 見返に「第二集」とあるが、序中に本作が六編目であることを記して  
 いる。

### おわりに

本稿では幕末維新时期に出版された太閤記物の切附本・絵本類の全体像の把握に向けて書誌調査を行い、版元別に体裁や形式の特徴を考察した。書誌調査の結果をもとに慶応期前後の出版状況をまとめると次のようになる（四八頁表）。また、本文を抜き書きしたり、挿絵を用いたりするなど、現時点で作品間の影響関係を具体的に示せるものに関しては矢印で示した。矢印で示したものに限定しても、読本『絵本太閤記』の影響力が明治期にまで及んでいることが明らかである。加えて、東都では慶応期頃から山口屋藤兵衛を筆頭に、軍記物や仇討物の切附本をシリーズ化する傾向が確認でき、シリーズ化に伴い一作の丁数が減るといふ傾向が見出せる。明治期には全丁絵入りの切附本が増え、歌川芳虎やその門下の浮世絵師が活躍している。一方、各書肆は切附本以外にも太閤記を題材とした錦絵を多数出版している。例えば、歌川芳艶『瓢軍談五十四場』や落合芳幾『太平記英勇伝』等の大揃いの錦絵や出世双六が出版されており、幕末の太閤記物の流行は広範囲に及んでいる。錦絵と切附本の挿絵とに図様の転用関係が指摘できるものもあり、今後は錦絵の出版を踏まえた研究が必要となってくるだろう。

最後に、本稿では取り上げていないが、幕末維新时期の切附本・絵本類の流れを汲む太閤記物は明治十年以降にも見出せる。辻岡屋文助版『清正一代記』『羽柴秀吉一代記』明治十四（一八八二）年や綱島亀吉版『太閤記銘々伝』明治十五（一八八二）年はこの流れに連なるものである。

こうした点からも、太閤記物の切附本・絵本の流行は、幕末明治期に生きた人々の知識世界の形成に少なからず影響を与えたと考えてよいのではないだろうか。

〔謝辞〕 本稿を成すにあたり、格別のご高配を賜りました各所蔵機関の皆様並びに高木元氏、山本和明氏、故鈴木圭一氏に厚く御礼申し上げます。

### 注

- (1) 岩切友里子「太閤記の世界」『浮世絵 大武者絵展』町田市立国際版画美術館、二〇〇三年、一九四頁。
- (2) 高木元「末期の中本型読本―いわゆる〈切附本〉について―」『江戸読本の研究 十九世紀小説様式攷』ぺりかん社、一九九五年、二一九～二五〇頁。
- (3) 金時徳「太閤記物・朝鮮軍記物の近代―活字化・近代太閤記・再興記―」(青山学院大学文学部日本文学科編『日本と〈異国〉の合戦と文学』笠間書院、二〇一二年、一四〇～一八八頁)。
- (4) 「切附本書目年表稿」は高木元氏のホームページ「ふみくら」にて随時更新されている。
- (5) 高木元氏が所蔵する切附本はARC古典籍ポータルデータベースで公開されている。
- (6) 『江戸買物独案内』文政七（一八二四）年によれば、山口屋藤兵衛の主要商品として絵草紙、千代紙、錦絵が挙げられている。
- (7) 注(2) 前掲書、二四二～二四三頁。
- (8) 加藤康子『幕末・明治豆本集成』国書刊行会、二〇〇四年、一〇二～一〇三頁。
- (9) 康志賢「岳亭作噺本・博物集・戯文、そして版元にかんする書誌学的研究」(『日本語文化』第二七輯、韓国日本語文化学会、二〇一四年、五八七頁)。
- (10) 『日吉丸誕生記』、『羽柴雲昇録』、『真柴軍功記』、『絵本太閤記』(伊勢屋版)、『真柴勲功図会』の典拠や具体的な本文の比較検討に関し



ては、日本近世文学会秋季大会（二〇二一年十一月二十一日）において発表した。

(11) 康志賢「岳亭定岡期の元治・慶応・明治期切附本の書誌学的研究」〔『日本日文学研究』八六卷二号、韓国日語日文学會、二〇一三年、六三―八三頁〕。

(12) 岩切友里子「浮世絵武者絵の流れ」〔『浮世絵 大武者絵展』町田市立国際版画美術館、二〇〇三年、一二六頁〕。

二〇二一年九月二十九日 受付

二〇二一年十二月二日 採択決定

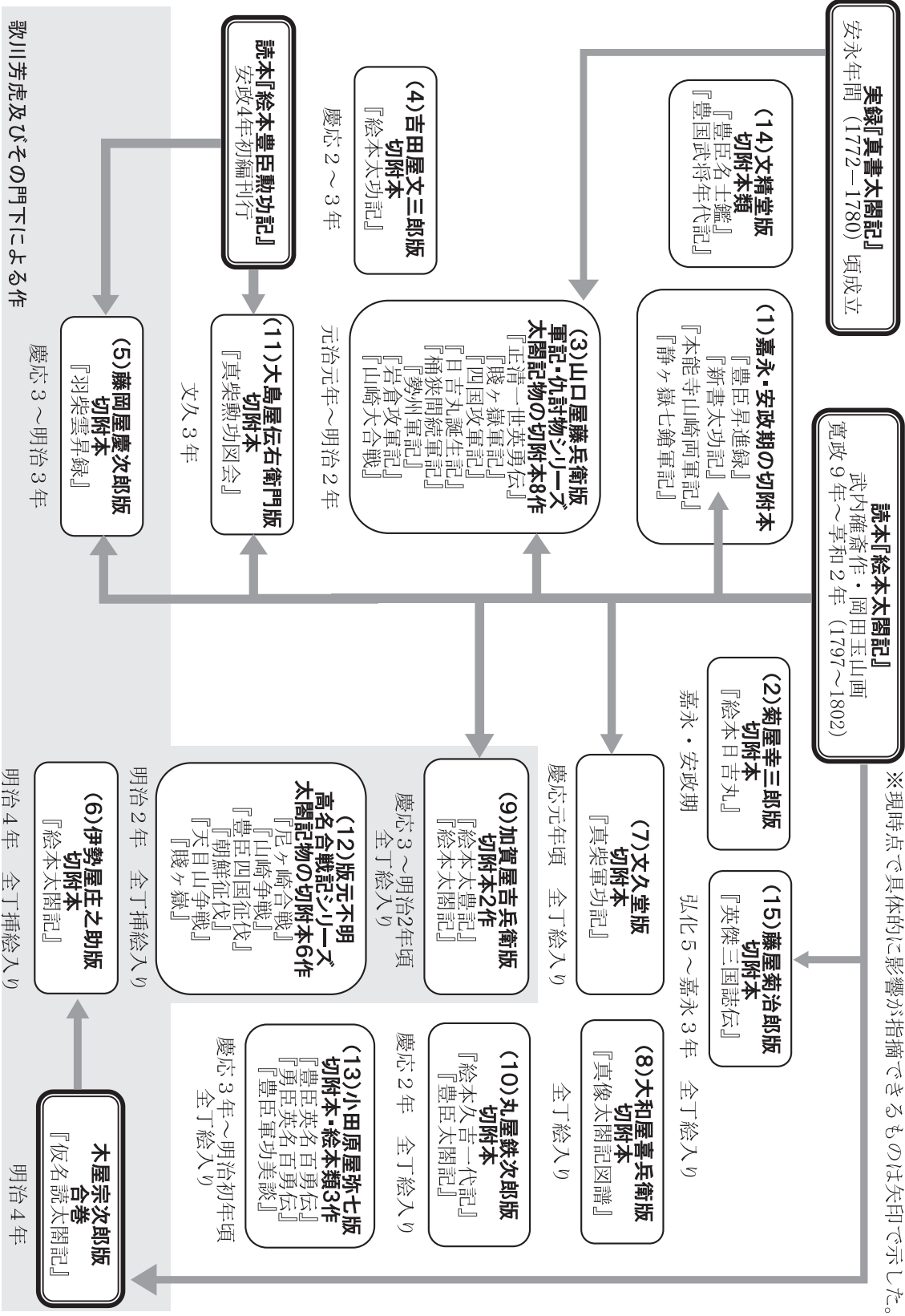




図2 『豊臣昇進録』初編見返  
国文学研究資料館蔵 (ナ:1051:1)



図1 『豊臣昇進録』初・二編表紙  
国文学研究資料館蔵 (ナ:1051:1-2)



図4 『絵本日吉丸』三輯挿絵  
個人蔵



図3 『新書太功記』二編表紙・1丁表  
国文学研究資料館蔵 (ナ4:1050)



図6 『四国攻軍記』上巻口絵  
架蔵



図5 『四国攻軍記』上巻表紙  
架蔵





図8 『絵本太閤記』初編挿絵  
白石市図書館蔵 (461)



図7 『絵本太閤記』初編表紙  
白石市図書館蔵 (461)



図10 『豊臣太閤記』巻末広告  
白石市図書館蔵 (475)



図9 『豊臣太閤記』後編上下巻表紙  
白石市図書館蔵 (475)



図12 『高名合戦記 尼ヶ崎合戦』挿絵  
架蔵



図11 『高名合戦記 尼ヶ崎合戦』表紙  
架蔵





図 14 『豊臣英名百勇伝』初編刊記  
石川県立歴史博物館蔵 (720-46)



図 13 『豊臣英名百勇伝』初編見返・序  
石川県立歴史博物館蔵 (720-46)



図 16 『勇臣英名百勇伝』二編見返・序  
石川県立歴史博物館蔵 (720-47)



図 15 『豊臣英名百勇伝』挿絵  
右：石川県立歴史博物館蔵 (720-46)  
左：個人蔵



図 18 『嘉永増補太閤記』表紙  
個人蔵



図 17 『勇臣英名百勇伝』巻末広告  
石川県立歴史博物館蔵 (720-47)

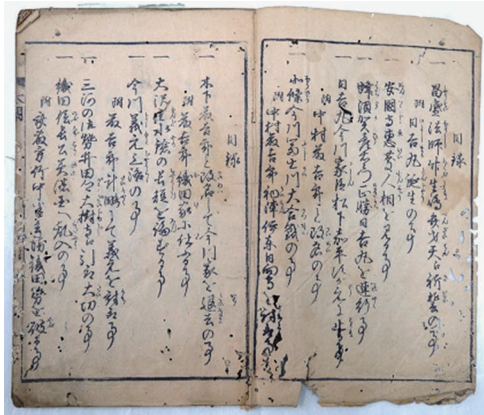


図20 『太閤御一代記』目録  
個人蔵

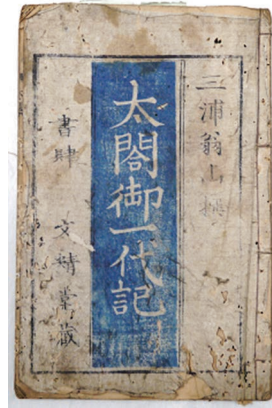


図19 『太閤御一代記』表紙  
個人蔵



図21 『画本三国誌伝』挿絵  
個人蔵

国文学研究資料館所蔵（寄託）の図版については二次使用を禁じます。